

聖書：ローマ 11：25～36

説教題：すべての栄光はただ神に

日時：2016年3月13日（朝拝）

いよいよローマ書 9～11 章のクライマックスの部分となります。パウロは「兄弟たち」と呼びかけていますが、ここで特に呼びかけられているのはローマにいる異邦人クリスチャンたちです。前回見たように、彼らはどうやら高ぶっていたようです。それは自分たちが今や教会の多数を占めるようになっていたからです。ユダヤ人は先の時代は神の民として特別な導きを受けたが、今や不信仰によってその特権を失ってしまった。今や神の祝福が取り去られた。そういう哀れな人々と見下す雰囲気があった。しかしパウロはここで、神は決してご自分の民イスラエルを退けてはおられないということを語っています。そしてあなたがたが自分を賢く思うことがないように「神の奥義」を知ってほしいと言います。「奥義」というと、私たちは「理解の難しいミステリー」というイメージを持つかもしれませんが、聖書におけるこの言葉の定義がローマ書最後の 16 章 25～26 節を見ると分かります。そこから分かることは、奥義とは「世々に渡って長い間隠されていたが、今や現わされたもの」ということです。ですからこれは確かに神秘的な内容を含みますが、今や神によって啓示されたもののことであり、私たちが十分に知ることもできるものです。

その奥義についてパウロは 25 節後半から 26 節前半でこう語ります。「その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。」この中身については前回と前々回に見て来ました。ユダヤ人は当時、イエス・キリストを退け、神の福音を拒否していました。神はその彼らをかたくなにされました。しかしそれで神はイスラエルを捨ててしまわれたのではなかった。11～12 節で見たように、神はそのことによって異邦人に救いが及ぶようにされました。しかし神はさらなる目的を持っておられた。それは異邦人の祝福を通してイスラエルにねたみを引き起こすということです。その結果、イスラエルの中から悔い改め、主を信じる者が起こされるようになる。こうしてイスラエルに祝福が戻って来るのです。この最後の状態を指して 26 節は「こうして、イスラエルはみな救われる」と言っていると考えられます。これは 12 節のイスラエルの「完成」と同じです。これはイスラエル人全員が救われるという意味ではありません。イスラエルの中の救われるべき人たち

がみな救われる状態に達するということです。

神がこうしてイスラエルを顧み続け、彼らを救うことは旧約聖書が預言していたことでした。26～27 節ではイザヤ書 59 章の言葉が引用されています。「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」 やがて救い主が現れて、ヤコブすなわちイスラエルの不敬虔を取り払い、その罪を取り除いてくださる。この約束に従って救い主イエス様は来られました。確かにここで言われていることはまだ十分にイスラエルに成就していないように見えます。しかし神は必ずこれを実現されるのです。イスラエルはみな救われるという祝福を実現してくださるのです。28～29 節も同じです。28 節：「彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、父祖たちのゆえに、愛されている者なのです。」 ユダヤ人はこの時、神に敵対していました。しかし彼らは選びによれば、アブラハム、イサク、ヤコブといった父祖たちのゆえに、すなわち族長たちに与えられた契約のゆえに愛されている者です。そして 29 節には「神の賜物と召命とは変わることがありません。」とあります。神は約束を撤回したり、破棄される方ではありません。ご自身が計画し、約束されたことを必ず最後まで果たして行かれるお方です。

さてここで議論になることがあります。それは「こうしてイスラエルはみな救われる」というのはいつのことなのかということです。これは歴史の終わりにイスラエルの大回心があるということなのか。これまで神の奥義の実行にはいくつかの段階があることを見て来ました。第一段階はイスラエルに福音が提供されるが、イスラエルがこれを拒絶し、神によってかたくなにされること。第二段階はその結果、異邦人に福音が宣べ伝えられて多くの者が救われること。第三段階は、その異邦人の祝福を見てイスラエルが妬み、信仰に立ち返って救われるようになること。そして第四段階は、イスラエルの完成によって全世界に「死者の中から生き返ること」と 15 節で表現されているような素晴らしい最後の状態が現れること。果たしてこの 4 つの段階はそれぞれ歴史の中で時代的に区別して現れるものなのか。もしそうであるなら、異邦人の完成というステージが起こった後、歴史の最終段階にイスラエルのリバイバルとも言うべき一大現象が起こることになります。それともこの 4 段階のプロセスは同時並行的に起こるものと見るべきでしょうか。ある異邦人が救

われ、祝福される様子を見て、ユダヤ人が救いに入り、また異邦人のさらなる祝福を見るにつけ、さらに他のユダヤ人が救われるというように。難しい問題ですが、前者の考え方を取るにはいくつかの難点があります。その一つは、この立場を取る人たちは「異邦人の完成」が生じた後、イスラエルの大回心が起こると見るわけですが、ではイスラエルの大回心が起こっている期間、異邦人は一人も救われないのでしょうか。これは非常に考えにくいことではないでしょうか。注意すべきは 26 節最初の言葉は「こうして」であることです。「それから」という言葉なら、異邦人の完成があって、それからイスラエルみなへの救いが起こると読めますが、そうではありません。25 節は、イスラエルと異邦人の相互作用・相関関係によって神の救いの働きが進められて行くことが語られていますが、これを受けて 26 節は「こうして」、すなわち「このような仕方」「このような方法」イスラエルはみな救われると言っているのです。歴史の最後にイスラエルの救いが集中する特別の時代が来ると言われているわけではありません。

また 2 つ目に注目すべきは 30～31 節に「今は」という言葉が繰り返し出てくることです。30 節ではイスラエルの不従順によって異邦人に救いの祝福が来たことが言われています。そして 31 節ではイスラエルは今は不従順だがあわれみを受けると言われています。ではそのあわれみを受けるのはいつでしょうか。パウロは「今や」と言っています。イスラエルが救われ始めるのは「やがて」とか「将来」ではなく、「今や」です。つまり先に見た 4 つの段階を通してイスラエルが救われて行くプロセスは、パウロの時代にすでに始まっている！ということです。もちろん世の終わりの近くに多くのユダヤ人が救われることは願わしいことです。しかしここで言われているのは歴史の最後にイスラエルのための特別プログラムがあるということではないのです。ただ神はイスラエルと異邦人の関係を通してイスラエルへのわざを継続して進められ、ついにイスラエルみなに救われるという日が来るといふことなのです。

さて今日、私たちが最も心に留めるべきみことばが 30～32 節に出て来ます。パウロはここでイスラエルになお望みがあることを示そうとしています。まず 30 節は異邦人についてです。あなたがたはかつては神に不従順であった。しかしイスラエルの不従順を通してあわれみを受けた。簡単に言えば、不従順だった者があわれみを受けました。それはイスラエルも同じであることが 31 節で述べられています。

すなわちイスラエルも今は不従順の状態にあるが、だからと言ってももう終わりなのではない。神はその不従順の状態から同じようにあわれみをもたらすことができる。これをまとめた非常に含蓄の深い御言葉が 32 節にあります。「なぜなら、神はすべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。」 新改訳は訳す順番が原文とは逆になっているため、ここにあるメッセージが良く見えない訳になっています。原文で最初に来ているのは、「神はすべての人を不従順に閉じ込めた」ということです。そしてその後で、その目的として「それは神がすべての人をあわれむためだ！」とされています。新改訳だと「閉じ込める」という言葉が後に来て、そちらが強調される形になっていますが、原文はむしろ閉じ込めたのは「あわれむためだ」という点を強調しています。新共同訳は次のように訳しています。「神はすべての人を不従順の状態に閉じ込められましたが、それは、すべての人を憐れむためだったのです。」

神は人々をまず不従順に閉じ込めました。もちろんその人々の悪に対するさばきとしてです。異邦人については 1 章後半でそのことが語られました。しかしそれで終わりではありませんでした。神はその先に、彼らをあわれもうとする御心を持っておられたのです。イスラエルも同じです。神は彼らに対するさばきとして彼らを益々かたくなにされました。彼らを不従順に閉じ込めました。しかし神はそこにさらなる目的を持っていて下さった。すなわち彼らをあわれもうとするということです。私たちはここに示されている驚くべき神の御心が分かるでしょうか。不従順の中にある人々には、もう望みがないのでしょうか。そうではありません！何と神はそこに贖いの目的を持っていてくださる。私たちに当てはめれば、私たちもかつては不従順の中にありました。神に従わない状態にありました。しかしそれは実は神によってそこに閉じ込められていたのであり、それは時至ってこうして救いを得るためでした。イスラエルもそうです。今、不従順であっても、神はなおその先に目的を持っている。神は彼らにあわれみを与えることができるし、その目標をもって彼らを導いておられる。何ということでしょうか！

このことが分かるなら、私たちにはもはや賛美しかありません。神の真理を知る人はここに至るのです。もし私たちがこの頌栄へと導かれないなら、これまで見て来たことをまだ良く理解していないということになります。パウロは 33 節で「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。」と言います。た

だ神の知恵と知識と富の奥深さに圧倒されて、我を忘れて神をほめたたえるのみです。続く「さばき」とか「道」とは、神の歴史の支配の仕方、その摂理のことを言っています。それは私たちの思いをはるかに超えて高く、奇しいものです。さらにパウロは言います。「なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。」これは誰が主の計画の相談役、またカウンセラーなのですかということです。もちろん私たちにそんなことはできません。また 35 節に「また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」とあります。これらのことは私たち人間から出て、主に教えたものではありません。従ってこれが到達する結論は一つです。それが 36 節の「すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至る」ということです。素晴らしい神の救いのみわざは、ただ神から始まり、神によって導かれ、最終的に神の栄光へとつながって行くのです。ほめたたえられるべきお方はただ神お一人。すべての栄光はただ神にのみ帰されます。私たちはただ神の偉大さ、きよさ、崇高さ、あわれみの大きさに打たれ、圧倒されるばかりなのです。

以上、イスラエルの不信仰の問題を 9 章から見て来ましたが、私たちが最後に導かれたことは人間的な判断で高ぶることではなく、神の知恵と知識の前でへりくだり、あわれみ深い御名を賛美するということでした。特に心に刻みたいのは頌栄直前の 32 節です。神がある者たちを不従順に閉じ込めていることには、さらに彼らをあわれもうとする御心がある。私たちも不従順のただ中からあわれみへと導かれた者たちです。イスラエルも同じなのです。そのことを思う時、今、どんなに神と反対の場所にいる人にもなお望みのあることが分かって来ます。そこから神がどんなあわれみのわざをなしてくださるか分からない。神は不従順の中に閉じ込めた者をあわれみへと導くことができる。私たちはこの神を見上げて、救いの唯一の道である福音を伝えたいと思います。また自らが救いの祝福に喜んで生きることによって、他者の妬みを引き起こし、その救いのために用いられたと思います。歴史は決して無目的のものではありません。すべてのことは神から発し、神によって成り、神に至ります。歴史は必ず神の栄光というゴールに到達します。クリスチャンはこういう見通しをこの先に持って、神とともに、神の栄光のために歩む者たちなのです。